

[026_1985]第二十六回中央図書館貴重文物展観目録 ： 西欧農学古典文庫の解題 ： 独書

九州大学附属図書館中央図書館

岩片，磯雄
九州大学農学部：教授

<https://doi.org/10.15017/1485136>

出版情報：大学広報. 546, pp.1-8, 1985-08-19. The Committee of Public Relations Kyushu University
バージョン：
権利関係：

大学広報

№.546

昭和60年8月19日発行

(編集)

九州大学広報委員会

第二十六回中央図書館貴重文物展観目録

(中央図書館)

西欧農学古典文庫の解題 — 独書2 —

はじめに

展観に際し教職員や学生諸君が多数来館されるよう希望します。

なお、今回の展観資料の選定、解説、配列等については本学岩片磯雄名誉教授に御指導御尽力を頂きました。ここに厚くお礼申し上げます。

記

展観場所 : 中央図書館メインロビー

展観期間 : 昭和60年9月3日(火)から

昭和60年10月31日(木)まで

展 観 資 料 の 解 説

16 Flotow, Gustav von (生没年次不詳) - Versuch einer Anleitung zu Fertigung der Ertrags- Anschläge über Landgüter, Leipzig, 1820.

著者はザクセン王国財務局参事官。本書では先づ各種農産物の評価および価値・利用・収量などについて述べ、次いで粗収益と純収益の区別、収益計画と計画書作成に当たっての注意事項、最後に農業評価法の一般的基準、ならびに特殊の処理について記述している。「農業評価学」(Taxationslehre) の極めて初期の著作である。ドイツで農業評価学が早くから農学の重要な分野として取り上げられたのは、早く発達した「地主信用組合」(Landschaft) の機能が、農政改革に伴って、ますます重要になったためと思われる。

17 Klebe, C. W. H. (1776-没年不詳) - Anleitung zur Verfertigung der Grund - Anschläge von Ertragegebenden Grundstücken und ganzen Landgütern, Leipzig, 1828.

著者は Bernburg で生まれ、長じてベルリンの農業監督官 (Ökonomie- Kommissar) となり、1821 年以降、主に共同地分割に関する三つの著書を出した。本書はその中の主要な一つである。本書は、土壌の種類の違いによる圃場の自然的収穫能性に基づいて、全農場の土地評価を行うための方法を明らかにし、共同地分割を合理的に行うことを目標に著作したものである。

18 Koch, C. F. (生没年次不詳) - Das Recht und Hypotheken-Wesen der Preussischen Domainen, Breslau, 1838.

著者はプロシアの控訴裁判所判事。プロシアにおける 御料地の発生ならびに拡大の御料地に関する法規および管理の歴史、ならびに抵当制度の実態を、農政改革の経過の中で敘述したもの。

19 Koch, J. (生没年次不詳) - Die Agrar-Gesetze des Preussischen Staats, nebst Ergänzungen und Erläuterungen, Dritte gänzlich umgearbeitete, mit den neuesten Verordnungen vermehrte Auflage, Breslau, 1843.

著者はプロシアの枢密院参事官。本書は緒言・旧農業法に関する史的序説・新農業法の要説・関係文献で構成され、農政改革当時のプロシアにおけるグーツヘル的=農民的諸関係の法社会学の実態を背景にして、1807 年の勅令に始まる改革を克明に敘述したもので、ドイツの農政改

革に関連して多く引用されてきた文献である。

20 Magerstedt, Adolf (生没年次不詳) - Der praktische Gutsverwalter, Sondershausen, 1846.

農業を営むには多面的な知識と能力を要するに至った時代的背景に則して、農場主に代って農場を有利に運営する責任を持つ「管理人」(Verwalter)が、心得ておくべきことを旨とし、全部で26書のうち、第1書の「農場管理人」を除けば、すべて後の農学・農業経営学を構成する内容である。本書の中では、第11書の「経営方式」(Wirtschaftssystem)が特に興味深く、Thaerのあとを受けて輪栽農法(Wechselwirtschaft, Fruchtwechsel-wirthsheft または Englische Wirtschaft)に特別な注意を払いながらも、エガルテン農法(Eggartenwirthschaft), 穀草式農法(Dreeschwirtschaft)など各種の休閒や草地をもつ経営についても解説し、それらに導入される作物の種類や耕作方法は、別のところでまとめてあつまっている。

21 Pabst, Heinrich Wilhelm Ritter von (1798-1868)- Anleitung zur Rindviehzucht, Stuttgart und Tubingen, 1829.

著者は初め Hohenheim で農業教師を勤め、その間に本書を書き、やがて Darmstadt の農業会議書記となり、晩年には Wien で内閣農業門題顧問になった。

ドイツでもこのころまでに、農業の各種専門分野の著作が出版されている。本書は牛飼養に関するもので、品種の選択、蕃殖、犢飼養、舎飼および放牧、酪農などについて解説している。右図は当時名声を博していたオランダ種(乳牛)の体型である。

22 Pabst, Heinrich Wilhelm Ritter von- Lehrbuch der Landwirtschaft, 2 Bde., Darmstadt, 1832-39; Erster Band, Dritte Auflage, 1847; Zweite, neu bearbeitete Auflage, 1843.

本書は「農学体系」とでも言うべきもので、第1巻は気候、土壌、開墾、耕耘、施肥、播種、管理、収穫について論じ、第2巻は第1部で養畜一般、次いで牛・羊・馬・豚・ろば・らばなどの飼養について述べている。

23 Pabst, Heinrich Wilhelm Ritter von- Die landwirtschaftliche Taxationslehre, Wien, 1853.

本書は Flotow の著作につぐ「農業評価学」の先駆的著作である、ドイツの農業評価学はこ

れらに始って、今世紀に入ると、次の名著を生むのである。

Friedrich Aereboe- Die Beurteilung von Landgütern und Gründstücken,
Zweite, durchgesehene Auflage, Berlin, 1928.

本書は端緒的著作であるだけに、農業評価学の内容がほとんど「土地評価学」(Die Bonitierung)であって、建物・家畜・機械などにはおよんでいない。原則として土地を耕地・採草地・放牧地・園地・植林地(Plantagen)・林地(Waldland)などに分け、先づそれぞれの収獲能性、次いで純収益の判定におよんでいる。

24 Liebig, Justus von (1803-1873)- Die Chemie in Ihrer Anwedung auf Agrikultur und Physilogie, 1ste Aufl. 1840; 5te Aufl. Braunschweig, 1843.

著者は有機化学、とくに農芸化学の祖と呼ばれ、植物栄養学説史上は Thaer の腐植学説に次ぐ鉱物学説 (Mineral Theory) を唱えた人とされる。

Darmstadt に生まれ、1822 年、当時学問の最も発達していたフランスに赴き、ここで von Humboldt から物理学者・化学者 Joseph- Louis Gay- Lussac (1778-1850) に紹介されて、彼の指導を受けた。1824 年、正教授になった。その後 Munch に移り、1860 年 Bayern 総合大学の総長になり、このころから研究から遠ざかった。

化学の研究でドイツにおくれているイギリスは、British Association for the Advancement of Scienceが中心になって著者を招いて講習を受けたが、本書はその講義録をもとにまとめたものである。

25 Schulze, Friedrich G. (1795-1860)- Thaer oder Liebig, Versuch einer wissenschaftlichen Prüfung der Ackerbautheorie, Jena, 1846.

ドイツの Meissen 地方に生まれ、初め Jena. 次いで Leipzig に学び、1817 年次校伯爵領の管理人となり、1819 年 Jena の大学附属農業研究所で教鞭をとった。以後本書の外にも 2~3 冊の著作をしている。

本書は Liebig の初期の鉱物学説を対象にして、この学説が唱えられるに至る方法論上の欠陥を指摘し、他方これと対照される Thaer の腐植学説の真意を解説して、これを擁護した著作である。

Liebig の鉱物学説が一時熱狂的に礼讃されたあと、イギリスのローザムステッド・グループによって批判されるに至る経過を念頭におくと、極めて興味深い著作である。

26 Liebig, Justus von- Die Chemie in ihrer Anwendung auf Agricultur und Physiologie, 2 Theilen 7te Aufl., Braunschweig, 1862.

本書は第7版となっているが、それはNo.24初版の1840年版から数えたもので、それぞれが部厚な2巻よりなり、第1巻は“Der chemische Prozess der Ernährung der Vegetabilien”, 第2巻には“Die Naturgesetze des Faldbaues”の表題がついている。初版を出して以来22年の間に、著者が「鉱物質」と呼んだものの実体は著しく変貌した。初期の著作では、それは「灰分」に外ならなかった。だが本書では、分解して無機物となり、植物栄養となる限り「有機的栄養素」をも鉱物質に包含した。

このような Liebig の学説に対する批判は、当初後のもとで研究し、後上ローザムステッド試験物を創設して、圃場実験と化学分析を併用したイギリスの John Bennet Lawes ; T. H. Gilbert, ローザムステッド・グループの緒論文に詳しい。これらを包含する雑誌“Journal of The Royal Agricultural Society of England, 1839~”は本文庫に所蔵されている。

27 Fraas, Carl Nicolaus(1810-1875)- Geschichte der Landbau- und Forstwissenschaft, München, 1865.

Rattelsdorf in Oberfrankeu に生まれ、München 大学に学び、やがてアテネの大学で植物学を講じ、ついで Schleissheim で化学を教え、後に母校の教授となった。1847年に処女作“Klima und Pflanzenwelt”, 1848年には“Grundriss der Landwirtschaftslehre, 1851年には“Geschichte der Landwirtschaft”を出版した。それから14年後に、林学史を加えて出版したのが本書である。Goltz の農業=農学史が出るのは1902年であるから、本書はこの分野での先駆的著作である。

林学史のみならず、農学史に関しても、今日なお参照すべき貴重な文献であろう。

28 Roscher, Wilhelm Georg Friedrich(1817-1894)- Nationalökonomik des Ackerbaus und der verwandten Urproductionen, 1ste Aufl., 1859 ; 13te Aufl. Stuttgart, 1903.

著者は Hannover に生まれ、Göttingen および Berlin 大学で歴史学と国家学を学び、1840年員外教授、翌年正教授となり、1848年以降は Leipzig 大学の教授となった。

本書はもともと System der Volkswirtschaft, 2 Bde. の中の Bd. I. Die Crundlagen der Nationalökonomik, 1854. に次ぐ Bd. II. として書かれたものである。第1巻とともに経済発展段階説を採り、研究の方法としては歴史主義をとっている。かくてドイツ経済学におけ

る歴史学派の祖となった第2巻にあたる3本書は、農業と林業に関する歴史主義的研究をまとめたものであって、農業経済学の重要な古典の一つである。その場合の一つの門題点は、人間文化の歴史が狩猟＝漁撈→遊牧→農耕の順で発達したものとしたことと後に「三段階説」と呼ばれるものの先駆をなした。今回展示したE. Hahn (No. 29～34)の著作は、この三段階説の批判を主内容としている。

29 Hahn, Eduard (1856-1928)- Die Haustiere und ihre Beziehung zur Wirtschaft des Menschen, Leipzig, 1896.

著者は Lübeck に生まれ、初の農業専門学校、次いで Berlen 大学で農学の講義を行った経済史家。その広範にわたる農学的知識に基づいて、先史学について研究し、家畜の馴化に関連した大きな業績を残した。

Roscher らに始まる三段階説に対して、自然学者 Alexander Freiherr von Humboldt (1769～1859) や経済学者 Bruno Hildebrand (1812-78)・Karl Büchler (1847～1930) らは、世界諸民族の中には、遊牧を知らずに農耕を行っている者が少なくないことから、幾多の疑問を持っていた。このような背景のもとに、著者は狩猟＝漁撈段階の後期には、女性による食糧採取とあわせて、ハック耕(著者は掘棒によるものも含める)が始まり、それを通じて牛の如きが馴化されて犁耕農業へと進化したと同時に、定着農業に適さない自然環境のところでは、遊牧が始まったものとした。

この説はしばらくは定説になっていたが、その後の研究の進歩によって、いまでは古典的業績になった。

30 Hahn, Eduard - Die Wirtschaft der Welt am Ausgange des XIX. Jahrhunderts. Heidelberg, 1900.

著者は 1789 年に始まるフランス革命に象徴される自由と平等の精神が、政治的にも経済的にも 19 世紀の産業と国際貿易の出発点をなしたものと評価する。そしてこうした趨勢に応じて、ヨーロッパの農業も合理主義の基調の下に大きな変貌を遂げてきた。かくて穀作までが国際分業化への動向を示しているのに対し、著者は各様の門題を投げかけた。Hahn としては多少異色の著書である。

31 Hahn, Eduard- Das Alter der wirtschaftlichen Kultur der Menschheit, Heiderberg, 1905.

本書は「感謝をこめて」Ferdinand v. Richthofen に献辞したもの、前著 *Haustiere* が尠大かつ難解であったのに省み、本書ではハック耕の成立、園耕への移行、さらに農耕への発展を平易を旨として書いたものである。

32 Hahn, Eduard- Die Entstehung der wirtschaftlichen Arbeit, Heiderberg, 1908.

本書は Karl Bücher がその著「労働と律動」(Arbeit und Rhythmus, Leipzig, 1896,)の中で、「労働はすべての経済現象の出発点であるが、労働の本質については今日に至るまで、国民経済学者によって未だによく明らかにされていない、」としたことを重視して、労働の本質の把握には、人間労働の歴史的発展とあわせて、地理学的・民族学(Ethnographie)的考察が必要であるとし、歴史的には少なからず Lewis H. Morgan (1818-1881) に学び、他面植民地主義と結びついた「プランテーション耕」について、これを「ヨーロッパ人のより高い知力が多数の非独立的なハック耕農民の力を自分たちの目的のために統合した形態」だと規定して、各種の考察を行った。

33 Hahn, Eduard- Die Entstehung der Pflugkultur (unseres Ackerbaus), Heiderberg, 1909.

前著“*Haustiere*”の中で、著者はすでにハック耕(Hackbau)、園耕(Gartenbau)、農耕(Ackerbau、後には Pflugbau と表現)の外にプランテーション耕(Plantagenbau)や遊牧(Viehwirtschaft)のような農業形態について述べ、ハックや掘棒によって耕作するハック耕は、条件の如何では灌漑と施肥を伴う集約な園耕に発展するか、そうでなければ、地力の減耗のために移動耕作(Wanderfeldbau)を行わざるを得ないとした。

これに対して本書では、ハックから犁への転化、役畜および用畜利用を伴う犁耕(Pflugkultur)の形成を論じた。この点は家畜の馴化とともに、今日では普遍現象としては受け入れられていない。

34 Hahn, Eduard- Von der Hacke zum Pflug, Leipzig, 2te verbesserte Auflage, 1919.

本書はドイツ歴史学派経済学の泰斗 Gustav Schmoller (1838~1917) および Adolf Wagner (1835~1917) に献辞したものである。

前著“*Haustiere*”と“*Die Entstehung der Pflugkultur*”のあとをうけて、著者は本

書で狩猟段階における女性による食物の採取から、ハックの使用、それから犁の発明と役畜の馴化による犁耕段階への進化という形で農耕文化の発展を系譜化した。そして犁耕では生産力の増大によって用畜飼養が容易になり、動物質食糧の増大と施肥に伴う地力維持と規模の拡大が可能になり、経済一般の高度化を基礎づけたものとした。